

Thomas D. Conlan

Kings in All but Name: The Lost History of Ōuchi Rule in Japan, 1350-1569

平 瀬 直 樹

I

大内氏は室町時代に周防国山口を本拠とし、関門海峡の両側に勢力圏を形成した大名である。祖先を百済王とし守護神を道教的な妙見^①とする独特のアイデンティティによって、朝鮮や明と密接な関係を持った。その強大な軍事力と経済力は室町幕府に頼られ、大内氏は中央政権と東アジアの間をつなぐ役割を果たした。

近年、大内氏関係史料の公刊及び考古学的発掘の進展により、大内氏に関する研究が盛んになってきた。そのような中で公刊された本書は半世紀ぶりの英語による大内氏についての研究書である（本書以前には後掲 Peter Arnesen 氏の著書がある）。今後邦訳も待たれるが、何より世界に向けて発信されたことが大変喜ばしい。一九九五年、著者を初めて山口市内の大内氏関連遺跡に案内して以来、著者との交流は長い。その後、著者を国際交流基金のフェローシップで受け入れ、石見銀山遺跡にも同行した。研究テーマをコラボしていたわけではないが、これまで互いに刺激し

あつて研究してきた。このようにいきさつから本書の意義を学界に紹介したく、書評を引き受けた次第である。

II

本書のタイトルは「事実上の王たち―日本における大内氏の失われた覇権の歴史（一三五〇年から一五六九年まで）」という意味である。以下では本書の内容を目次に従って概観したい。なお、タイトルと各章の表題については著者と相談の上で和訳を施した。

〈目次〉

- 序章 大内氏の失われた覇権の歴史
- 第一章 大内氏の起源
- 第二章 創始者 大内弘世
- 第三章 大内義弘と大内氏のアイデンティティの創出
- 第四章 星を見た者―大内盛見の思いがけない統治
- 第五章 友誼の継承、貿易の拡大、そして永続的な統治
- 第六章 交易する者、將軍、王、そして神格
- 第七章 大内政弘と山口の勃興
- 第八章 義興と大内氏支配の絶頂期（一四九五―一五二八）
- 第九章 大内義隆の大勝と悲劇（一五二八―五一）
- 第一〇章 崩壊
- 終章 遺産

序章では、本書の骨子を成す論点が列挙されている。

（一）朝廷は大内氏に支えられて一五五一年まで機能していた。

この頃まで京都は儀式の中心として、山口は経済的中核として機能しており、国家の秩序が保たれ、幕府と朝廷による「中央」は健在であった。この考え方は戦国時代の開始を応仁の乱（一四六七―七七）からとする従来の説よりも一世紀ほど遅らせるものである。（2）大内氏の繁栄の基礎は農業生産ではなく、朝鮮と明との間に行われた銅と銀の交易によるものであった。（3）大内氏は百済人の血統であるとするユニークなアイデンティティを強調した。（4）大内氏は宇佐八幡など支配圏内の領民が崇敬する神々を庇護し、支配の安定をはかった。（5）大内氏が広大な範囲に勢力を持っていたのは、単に守護職だけに依らず、守護ではない国の土地や港であっても他の大名による支配を防いだからである。（6）大内氏の滅亡後、九州北部や本州西部は徳川幕府の支配下に入ると、朝鮮から切り離された。（7）後世の歴史家にとって幸運だったのは、毛利氏によって大内氏史料の厳格な調査と評価の伝統が受け継がれたことである。

著者は（1）から（7）の論点を総合し、一五世紀から一六世紀にかけて、日本の政治的・経済的センターが京都から本州の西端にある大内氏の勢力圏内に移動したという見解を述べている。

第一章では、周防国の豪族多々良氏は支族同士がライバル関係となっており、特に一四世紀半ばにともに支族である大内氏と鷺頭氏の間で生じた氏神の祭祀をめぐる紛争について語る。

第二章では、大内氏で初めて守護に任じられた弘世が長門国の征服により鉾山を手に入れ、そこからさらに石見銀山や都茂銅山がある石見に進出したと論じている。さらに弘世は関門海峡や安芸の東西条など最も戦略的な地域とのつながりを築いた。

第三章では、名将として知られる義弘（弘世の子）が朝廷や幕府に近づく一方、朝鮮王朝とも親密となり、百済王の血を引くという由緒を認めさせたことに注目している。

第四章では、盛見（義弘の弟）の政策の特徴を取り上げた。朝鮮との交易を監督し、鉾山の改革を行い、支配の安定のため勢力圏内の諸国の中心的な神社を我が物にしたと述べている。また、採掘された銅の貿易が特に朝鮮との関係を緊密にしたことに言及している。

第五章では、盛見の死後、義弘の遺児の三兄弟による家督争いで勝った残った持世の時代が扱われている。持世は將軍の暗殺に巻き込まれて死んだため統治の期間が短い、「壁書」を掲げ、領内に居住するすべての人々に対して超越的な司法権を強調する政策を開始した。

第六章では、教弘（盛見の子）が銅の輸出を事実上独占し、西国に独自の武家政権を作ろうとしたと論じる。大内氏は、石見の大森（銅・銀の採掘地）や長門の長登銅山から採掘された鉾石を大陸に輸出した。そのうえ関門海峡を掌握していたため、勢力圏外の鉾山から採掘された鉾物の輸送も事実上支配していた。

第七章では、政弘が父である教弘の野望の結果、足利義政と応仁・文明の乱を戦ったことに注目している。彼は独立した武家政権を樹立するという父の夢を放棄したが、山口を事実上の日本の首都にした。そして、父の神格化を確実なものにした。

第八章では、義興（政弘の子）がクーデターで追放された將軍義植を復帰させ、都の秩序を回復したことを中心に論ずる。彼は日本で最も神聖な伊勢神宮の神を山口に移し、將軍から「日本国

王印」を委ねられ対明貿易を独占した。

第九章で取り上げられるのは、義隆（義興の子）が *trading empire*（貿易帝国）を形成し権力の絶頂期を迎えながら、陶晴賢の反乱で滅んだという大内氏体制の瓦解である。これまで義隆は失敗した大名のように言われ、朝廷文化の消極的な実践者とされてきたが、著者は成功した面に注目している。義隆は安芸の武田氏と筑前の少貳氏という二大ライバルを滅ぼし、將軍の影響力も払拭した。鉾山を改良し、貿易を促進し、領内の寺社を再建する一方で、ヨーロッパの宣教師と出会った。ところが、朝廷の儀式を守ろうとしたところ、これが統治の手段であると理解されず、多くの家臣から輕蔑されるようになった。最後に、山口を日本の首都にするための準備に没頭している最中、謀叛により自身が滅ばされ、この計画は失敗した。

第一〇章と終章をあわせて、著者は義隆が殺された一五五一年が「大内体制」の終わりであり、日本の「戦国化」の始まりであると主張している。大内氏の滅亡で朝鮮や明との外交知識が失われたが、毛利氏は大内氏の遺品を可能な限り収集した。江戸時代になると幕府が室町幕府の後継者であると自認したので、朝廷儀礼が一六世紀半ばまで政治の手段として機能していた事実は無視され、山口と大内氏の偉大さも忘れ去られた。

III

本書に掲げられた論点に対し、以下に注目点と若干の感想を述べたい。

まず、大内氏の繁栄の基礎を鉾山開発に求める視点は斬新であ

る。従来は室町・戦国大名の領国支配について貫高制や検地といった政策が注目されてきたが、著者は農業よりも鉾山を重視している。戦前では小葉田淳氏^⑥によって中世の鉾物貿易の研究が進められ、近年では鹿毛敏夫氏^⑦が鉾物を介してアジアとつながった戦国大名の研究を行っており、鉾山開発の視点は重要であることがわかる。著者はこの視点を本書の全編に貫き新たな大内氏像を提示している。著者は採鉾に人々を動員するためには朝廷から政治的権威を得る必要があったと述べており、大内氏が朝廷に近づいた理由についてもこの視点から斬新な解釈を施している。

著者は盛見の代を大内氏の転換点ととらえている。兄の義弘に比べると知名度が低い^⑧が、盛見以降、大内氏はそれ以前よりも領国支配、中央政治との関わり、海外との関係において格段に重みを増していくという。盛見は弘世の子息の中で地位は低かったが、義弘死後の混乱の中で他の兄弟を退け、思いがけず家督をつかんだ。義弘には持世などの子息がいたが、持世が死ぬと義弘の血統は途絶え、盛見の血統が最後の義隆まで続いた^⑨。特に政弘、義興、義隆の三代が同じ幼名「亀童丸」を受け継いでおり、いわば盛見の「王朝」が大内氏の最盛期を担った。盛見の代に対幕府関係、対外関係、一族のアイデンティティ、関門海峡の周囲の守護領国の配置など、後の領国支配のスタンダードなことができた^⑩。また、著者は盛見の時代に銅の採掘の画期を見出している。

盛見は奈良時代に東大寺大仏を造立した長登銅山を再興し、新しい製錬技術によって朝鮮への銅輸出を増大させた。ここで興味深いのは、盛見が山口の国清寺^{こくしょうじ}に銅山の土地を寄進し、国清寺が労働力を動員し、採掘を監督したという指摘である。このほか著

者は盛見¹²⁾の名前の読みをモリアキラとする新説を唱えている。読みが記された文献を見つけた上、名前の意味を「妙見の星を見ることが出来る者」と解釈している。この説はたしかに説得力があるが、定説となるには他にも事例が発見される必要があるだろう。著者は義隆のイメージを転換させることによって、戦国時代観の新しい提言を行っている。これまで諸国の大名が朝廷に近づく行為は、官位を利用して近隣のライバルよりも優位に立つためであったと説明されてきた。¹³⁾しかし著者は、義隆が朝廷を支えたのは国家体制を維持するためであったと述べ、これによって「文人であるために減じた大名」という義隆のイメージも改められた。

あわせて著者は戦国時代の時代区分の見直しを行い、日本が混乱の時代になるのは義隆が減んだ天文二〇年（一五五一）より後とする。通説で戦国時代とされてきた「応仁・文明の乱」以降は、その大半が大内氏に支えられて中央が機能していた「山口の時代」であったというのである。しかし、このような戦国時代観を定着させるには、他の大名の動向も視野に入れた上、今後の議論が必要であろう。そして、義隆が最後に朝廷を山口に移転させ、山口を日本の首都にしようとしたという著者の主張¹⁵⁾の評価と密接に関わっており、あわせて検討されるべきであろう。

以上をもとに本書の持つ意義を述べたい。

本書は明治一八年（一八八五）刊行の近藤清石『大内氏実録』に続く本格的な大内氏の通史ということが出来る。しかも古代における多々良氏（大内氏の祖先）から室町時代までの歴代当主を扱っているが、けっして概括的ではなく、史料調査に基づき、独自に解明した事実を踏まえて叙述している。

著者は朝廷と幕府が共同して日本列島を支配している室町時代のイメージからいったん離れ、西日本とアジアが直接結びついたような政治勢力を想定している。そのような政治勢力である大内氏が中央政権を支え、国家祭祀を代行しようとしたという発想は今後注目を受けるだろう。

また、大内氏の歴代当主が、守護職を持たない石見や安芸にこだわった理由を鉾山の支配と鉾物の輸出港の支配から説明したことは重要である。持世の代以降、大内氏は常に関門海峡を囲む四か国（周防・長門・豊前・筑前）の守護職を堅持し、これに加えて石見や安芸にも拠点を保持していた。

著者は日本人研究者の研究成果を貪欲に吸収し、積極的に交流を持っている。このほか本書各ページの脚注を見ると、著者が日本中世史の分野で多くの海外の研究者の文献を参照していることがわかる。あわせてAcknowledgmentsに掲げられた研究者の名前を見ると、海外での日本中世史研究の状況の一端が窺える。特に興味深いのは、本書に先行してPeter Arnesen, *The Medieval Japanese Daimyo: The Ōuchi Family's Rule in Suō and Nagato*¹⁶⁾という大内氏に関する英書がすでに刊行されていたことである。このほか著者はアジア史に関する海外の文献も多数参照している。本書を見るだけでも今後の日本中世史研究は外国人研究者の研究成果を積極的に吸収する必要性を強く感じる。

以上のように本書はスケールの大きな研究であるが、いくつかの疑問点も指摘しておきたい。

大内氏の本拠について、著者は弘世が南北に走る街道と東西の道とを結びつけた上、この十字路の北に屋敷を建て、山口の町を

造成したと述べている。山口の整備は従来、政弘の代まで時代が降ると言われ、近年では守護の初代である弘世の頃まで遡らせる考え方が提唱されている。しかし、先ず大内氏の本拠は大内村にあり、次に守護大名として発展する過程で全領国の中心として山口の町が整備されるという過程があった。弘世の段階で明使趙秩が訪問したのは大内村であり、大内氏にとって最も重要な興隆寺や朝鮮式の瓦が葺かれた乗福寺も大内村にあった。それゆえ著者が興隆寺や乗福寺を Yamaguchi's Koryuji Hikamisan や Jōkukujin Yamaguchi とするのは誤解を生む恐れがある。たしかに現在では市内中心部にあたる山口地区とそこに隣接する大内地区はともに山口市内に含まれる。しかし、大内と山口は中世でも近世でも歴史的役割が異なっており、両者の区別は重要である。本拠の変遷や山口の都市形成の問題はもう少し慎重に扱ってほしい。

また、大内氏の祖先伝説について著者の理解に問題がある。大内氏の祖先は百済の琳聖太子であり、太子が日本に來た際に降下した星である妙見が以後大内氏の守護神になったという。しかし、著者は大内氏を heir and descendant of Myōken (妙見の後継者であり子孫) と記している。たしかに大内氏の祖先伝説は難解で紛らわしいが、祖先と守護神は区別されねばならない。

IV

以上、評者の英語力で本書の内容をどこまで伝えられたか心配であるが、大内氏の研究が海外に発信された意義は大変大きく、多くの人は是非読んでもらいたい。また、著者が踏まえた多数の日本人による研究が本書を介して海外に紹介されたことも意義深

い。そして最後に、本書を目の前にして評者が切に思うことは、将来は日本中世史研究者の誰もが自ら外国語を操って著作を海外に発信し、多様な感性を持った海外の研究者と盛んに情報交換や論争ができるようになってほしいということである。

- ① 北極星が神格化されたカミ。
- ② このことは平瀬直樹『大内氏の領国支配と宗教』（塙書房、二〇一七年）序章で述べている。
- ③ 多々良氏は平安・鎌倉時代には周防国の在庁官人であり、鎌倉時代までに大内村を本拠とする大内氏や鷺頭荘を本拠とする鷺頭氏などに分派していた。
- ④ 六代將軍足利義教が赤松満祐に謀殺された事件（嘉吉の乱）を指す。
- ⑤ 築山大明神の神号を与え、教弘の築山館を神社として祀った。
- ⑥ 小栗田淳『金銀貿易史の研究』（法政大学出版局、一九七六年）。ただし、所収の論文の多くは戦前の成稿である。
- ⑦ 鹿毛敏夫『アジアのなかの戦国大名―西国の群雄と経営戦略』（吉川弘文館、二〇一五年）。同氏『戦国大名の海外交易』（勉誠出版、二〇一九年）、同氏『世界史の中の戦国大名』（講談社、二〇二三年）など。
- ⑧ 義弘は応永六年（一三九九）に幕府に対して反乱を起こし（応永の乱、和泉国堺で滅んだ）。
- ⑨ ただし、義隆が死んだ後に陶晴賢が大友氏から義長を迎え入れて家督に据えたので、しばらく大内氏の政治体制が続いた。
- ⑩ 亀は道教的な妙見のシンボルである。妙見が大内氏の始祖である琳聖太子が来朝するのを鎮護したように、三代の幼名には妙見の加護を受ける存在という意味あいがあった。平瀬直樹前掲書第三部第二章「大内氏と妙見信仰」参照。

- ⑪ 大内氏は寺社を領国支配に活かすのが巧みである。盛見が後に自分の菩提寺になる禪宗寺院を鉱山開発に関係させたのは興味深い。
- ⑫ 現在はモリハルまたはモリミが一般的である。
- ⑬ 同氏「吉田兼右が写した大内系図」(『山口県史研究』二二、二〇一三年)。
- ⑭ 今谷明『戦国大名と天皇―室町幕府の解体と王権の逆襲』(講談社、二〇〇一年、初出は一九九二年)など。
- ⑮ トーマス・コンラン「大内義隆の遷都計画」(『山口県地方史研究』一二三号、二〇二〇年)参照。陶晴賢の謀叛の際、公卿の二条尹房・三条公頼・持明院基規と実務官僚の小槻伊治が殺害されており、著者は、山口に下向した公家たちは首都機能を山口に移すために必要とされたと考えている。
- ⑯ 大内氏は石見国では邇摩郡を支配し、安芸国では東西条を所領とし、そこに鏡山城を築いた。
- ⑰ 黄霄龍・堀川康史編『海外の日本中世史研究―「日本史」・自国史・外国史の交差』(『アジア遊学』88) 勉誠社、二〇二三年)でこのことが取り上げられており、トーマス・コンラン「光と闇を越えて―日本中世史の展望」も掲載されている。
- ⑱ Yale University Press, New Haven 1979 (邦訳なし)。
- ⑲ 一族の守護神である妙見を祀る大内氏の氏寺であり、毎年、妙見を主神とする二月会が営まれ、その執行には全領国が奉仕する政治的意味あいがあった。平瀬直樹前掲著書第三章「興隆寺と二月会」参照。
- ⑳ 鎌倉末期の当主である大内重弘の菩提寺。
- ㉑ 近世で大内と山口は別々の「村」であったが、山口は在郷町の性格も持っていた。
- ㉒ 注⑩平瀬直樹「大内氏と妙見信仰」参照。